

藤島城跡

第3次発掘調査報告書

1990

山形県教育委員会

ふじしまじょう

藤島城跡

第3次発掘調査報告書

平成2年3月

山形県教育委員会

序

本報告書は、山形県教育庁総務課の依頼を受けて平成元年度に実施した、県立庄内農業高等学校ガラス温室新築工事にかかる「藤島城跡」の緊急発掘調査の結果をまとめたものです。

藤島城跡は、鎌倉時代末から戦国時代を通して庄内の重要な拠点としてその名をしばしば歴史に登場させてきました。今なお残る土壘と堀は、威風堂々たる姿に益々磨きをかけています。

本遺跡の第1次発掘調査は、昭和54年に河川改修に伴う緊急発掘調査として行われ、今年度第2次・第3次の調査が行われました。本調査はその中の第3次調査にあたります。調査では、土壘跡・堀跡・礎石建物跡の遺構をはじめ、青磁・白磁といった輸入陶磁器や珠洲焼・越前焼・瀬戸焼等の多くの遺物が出土しました。折しも中・近世の考古学が大きな注目をあびている中、本遺跡の調査も有意義なものであると確信しています。

近年、県民福祉・県経済の向上を目的とした開発事業の進展に伴い、埋蔵文化財との関わりも増加の傾向にあります。これらの間には、今なお多くの問題が介在していることは、現実問題として、大きな課題を与えられていることになります。山形県教育委員会では、「心広くたくましい県民の育成」という立場から、一つずつ問題を解決し、今後も埋蔵文化財の保護と活用のため努力を続けていく所存です。

終わりに、本調査に御協力いただきました地元の方々及び関係機関に深く感謝申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護・普及の一助となれば幸いです。

平成2年3月

山形県教育委員会

教育長 木場 清耕

例　　言

- 1 本報告書は、山形県教育委員会が山形県教育庁総務課の依頼を受け、平成元年度に実施した「県立庄内農業高等学校ガラス温室新築工事」に係る「藤島城跡」の緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査期間は、平成元年6月13日～同年7月7日の延べ19日間である。
- 3 調査については、県立庄内農業高等学校・藤島町教育委員会・庄内教育事務所の関係機関、並びに藤島町の方々から協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。
- 4 調査体制は、下記の通りである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐々木洋治・佐藤 正俊

現場主任 伊藤 邦弘

調査員 布施 明子

事務局 事務局長 土門 紹穂

事務局長補佐 斎藤 久子

事務局員 新関 紘子・長谷川 浩・高橋 春雄・永井 健郎

- 5 本報告書の作成は、伊藤邦弘・布施明子が担当・執筆し、挿図・図版の作成補助には、鈴木孝子があたった。本書の編集は、布施明子・伊藤邦弘・安部 実が担当し、全体についてでは、佐々木洋治が総括した。

- 6 出土遺物については、山形県教育委員会が一括保管している。

凡 例

1 本書で使用した遺構の分類記号は下記の通りである。

S F : 土壘 S B : 建物跡 S D : 焼跡・溝跡

S K : 土壙 S P : 小穴 S X : 性格不明遺構

2 本書の執筆基準は下記の通りである。

- (1) 遺跡全体図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は磁北より35° 西に傾いている。
- (3) 遺構実測図は1/20・1/40・1/100の縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
- (4) 遺物実測図・拓影図は1/3、遺物図版は1/2・1/3で採録した。
- (5) 土器・陶磁器類の断面のみ実測したものに関しては、断面の右側に外面を、左側に内面を表した。
- (6) 基本層序及び遺構覆土の色調の記載は、昭和45年度版農林省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に掲った。
- (7) 本書中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版とも共通のものとした。

目 次

I 調査に至る経過.....	1
II 遺跡の立地と環境.....	1
III 調査の概要.....	2
IV 検出された遺構と遺物	
1 遺構.....	3
2 遺物.....	12
V 調査のまとめ.....	16

挿図目次

第1図 遺跡位置図.....	1
第2図 調査区位置図.....	2
第3図 遺構概要図.....	5
第4図 S D 1 堀跡・S F 2 土壘土層断面図.....	7
第5図 S B 3 建物跡.....	9
第6図 S K10土壤.....	10
第7図 遺物実測図(1).....	12
第8図 遺物実測図(2).....	13

図版目次

第1面 遺構検出状況(北から).....	3
第1面全景(南から)・第2面全景(北から).....	4
S D 1 堀跡土層断面(西から)・S F 2 土壘土層断面(北西から).....	7
S K10土壤(東から).....	10
S B 3 建物跡(北西から)・S D12溝跡(北から).....	11
出土遺物(陶器)・出土遺物(瓦器・陶器).....	14
出土遺物(青磁・白磁)・出土遺物(染付).....	15
出土遺物(錢貨・石製品).....	16

I 調査に至る経過

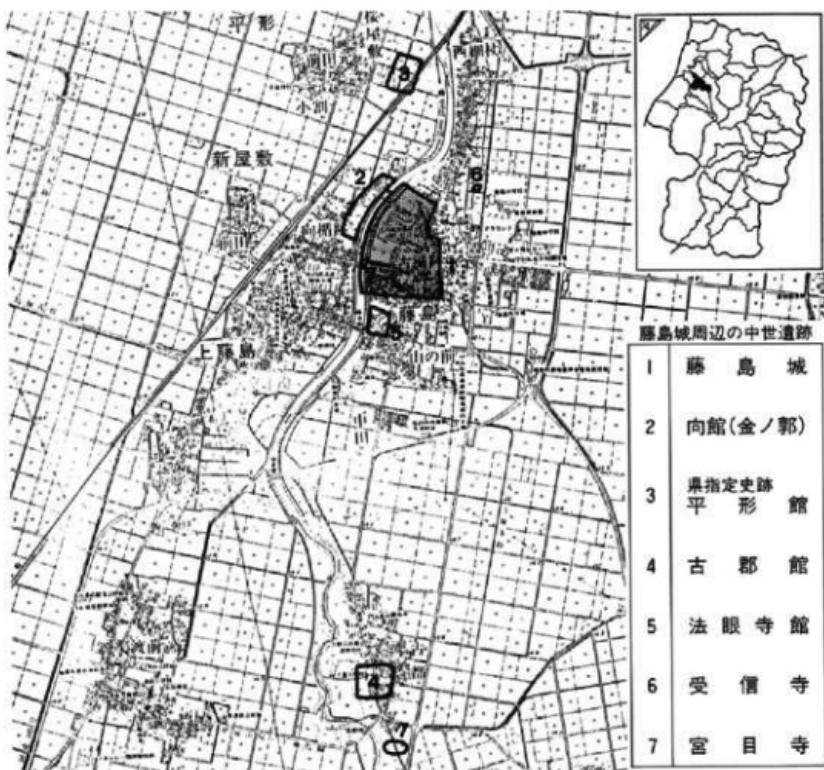
藤島町の史跡に指定されている藤島城跡は、一部八幡神社の境内となり、大半は県立庄内農業高等学校の敷地になっている。

本遺跡は、第1次調査として昭和54年に藤島川の河川改修に伴う緊急発掘調査が行われ、平成元年には体育馆新築部分について第2次調査を行っている。

本調査は、平成元年に藤島城跡の本丸に当たる部分についてガラス温室が新築されることになり、関係機関と協議した結果、山形県教育委員会が主体となり緊急発掘調査を行う運びとなったもので、藤島城跡としては第3次調査となる。

II 遺跡の立地と環境

藤島城跡は、山形県の北西部に広がる庄内平野の、ほぼ中央に位置する東田川郡藤島町の古橋跡108の1他に所在する。東西16km、南北20kmの三角形の町域をなす藤島町の南東部



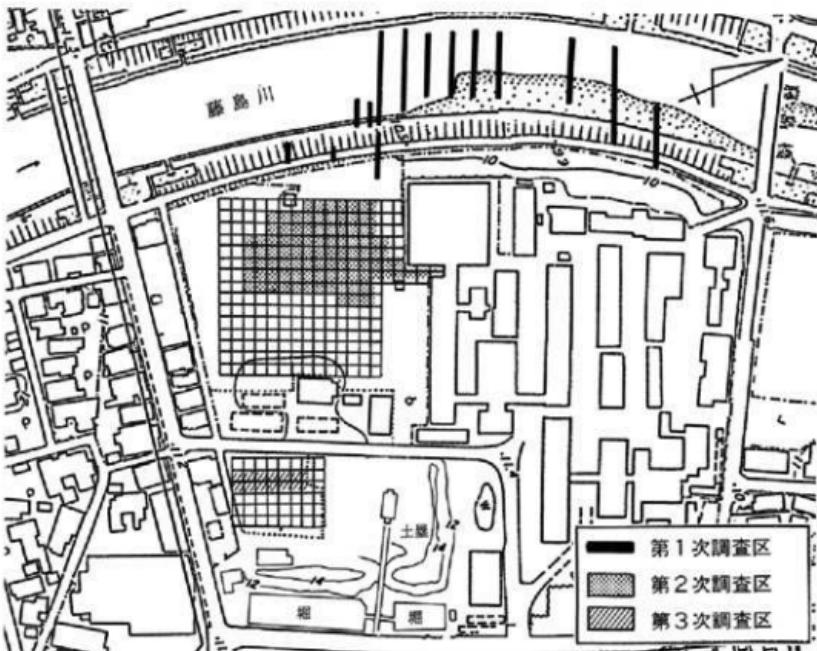
第1図 遺跡位置図(S = 1 : 25,000)

は山林地帯であり、西部には、源を月山に発する藤島川によって潤される肥沃な耕地が広がる。現在穏やかな表情を湛えている藤島川は、河川改修以前には流域に度々水害をもたらしたと言われる。藤島城はその藤島川の自然堤防上に立地する。

本遺跡の周辺には数多くの遺跡が点在する。中でも藤島川を挟んで西岸には、伝えるところによれば、慶長年間の藤島城籠城の際に築かれた出丸であろうと考えられているものが、向館として独立した遺跡名を持ち登録されている。また本遺跡の南約200mの所には、土星の一部が現存する法眼寺館があり、さらに周辺には、室町時代の寺跡である受信寺や県指定史跡の平形館等がある。一方藤島城跡の周囲は城下町が形成されており、入り組んだ道路からもその一端が伺われる。いうなれば、藤島町の中心部全体が大きな遺跡としてとらえることができよう。

III 調査の概要

調査期間は平成元年6月13日から同年7月7日までの延べ19日間である。グリッドの設定は、第2次調査の軸に合わせ、磁北からN-35°-Wを測る。グリッド単位は5×5mを1単位とした。第2次調査の結果から、遺構検出面は2面以上あることが想定され、第1面の遺構を検出し掘り下げ後、第1面の遺構による擾乱が少ない所に限り、第2面遺構の精査を行った。調査面積は第1面240m²、第2面120m²、調査総面積は360m²である。



第2図 調査区位置図(S=1:2,500)

IV 検出された遺構と遺物

1 遺構

遺構の分布は調査区北東に集中する傾向が見られる。このことから、調査位置が從来本丸と考えられている所の南西端にあたることが想定される。

本調査で検出された遺構には、第1面では土塁跡・堀跡・礎石建物跡・土壙・溝跡・ピット等、第2面では溝跡・ピットがある。調査は240m²と狭い範囲に限られたことから、全形を知り得る遺構は多くない。以下主な遺構について概述する。S F 2 土塁跡は、基底部の幅約8.4mを測る。上部は削平されているが、断面観察の結果、高さ70cmまでは残っていたことが確認される。構造は厚さ20cm前後でシルト・細砂・粗砂等を用いて盛築されている。現存する土塁とほぼ平行関係にあるが、現存する土塁基底部の幅が10mをこえるのに対して狭く、同一期のものであるかは疑問が持たれる。また基底部には、柱根が残る柱穴や小穴・溝跡が見られる。S D 1 堀跡は S F 2 土塁跡のすぐ南に位置する。深さは1.2m、幅は不明である。2mで約40°の傾斜角をもち、底は平である。遺物の出土が最も多く、38点を数える。中でも珠洲系陶器・越前系陶器が多く、その他青磁・染付・石製品等が出土している。



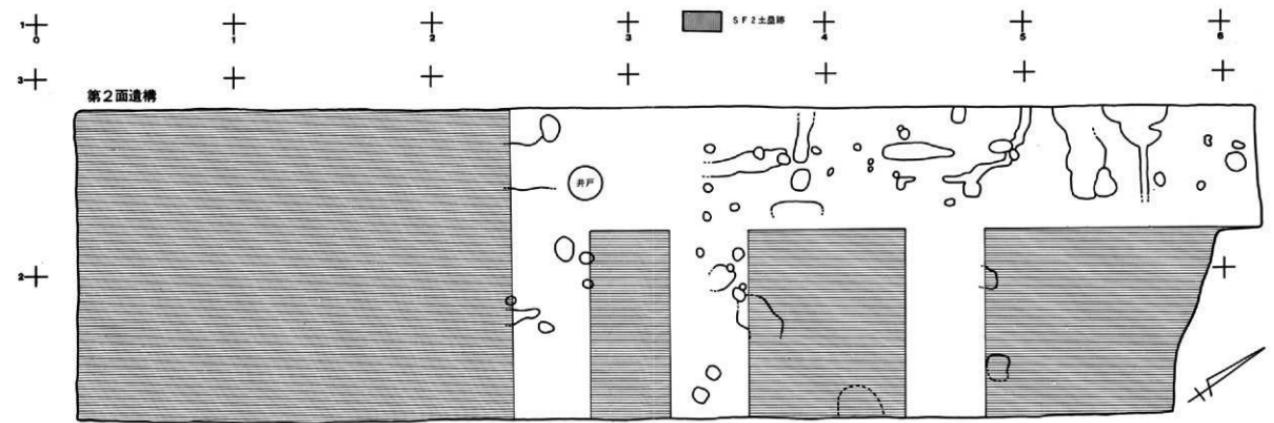
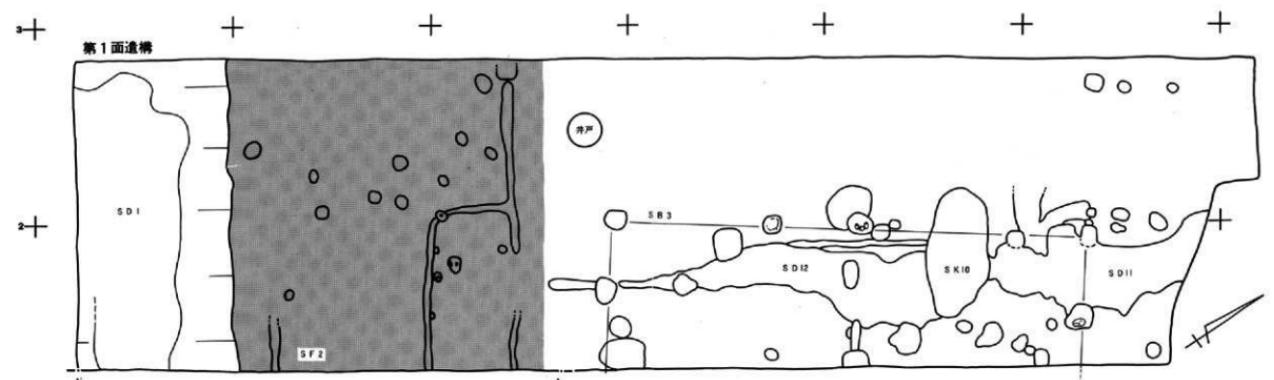
第1面 遺構検出状況(北から)



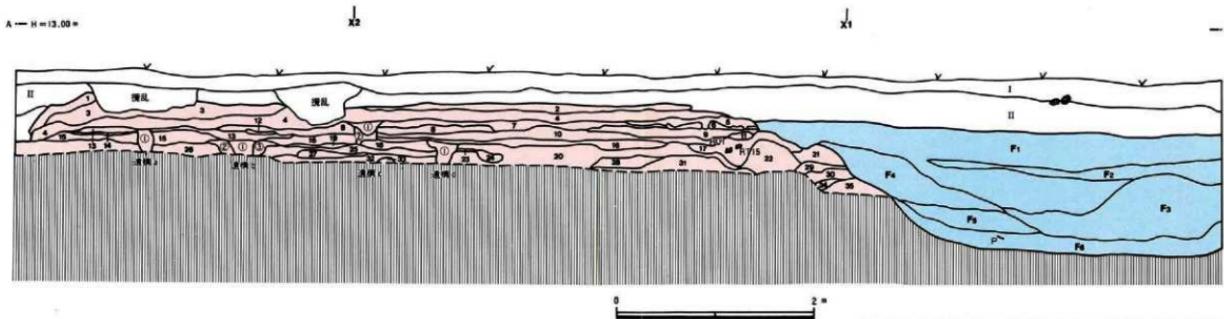
第1面全景(南から)



第2面全景(北から)



第3図 造構概要図($S = 1 : 100$)



I 10Y R 5%暗褐色
II 10Y R 5%褐色
III 粗砂 軟らかい、現況の焼却作土
官舍の堅地層、炭化物と1cm内外の礫が多い

(S D 1 堀跡)
F 1 2.5 Y 5%オリーブ褐色
F 2 2.5 Y 5%オリーブ褐色

粗砂 炭化粒・小礫・褐色細砂・遺物
しまりがない

F 3 2.5 Y 5%暗灰褐色
粗砂 大量の炭火粒・小礫含むし
りがない

F 4 2.5 Y 5%暗褐色
粗砂 黄褐色と暗灰色土が混じりあ
っている

F 5 2.5 Y 5%黄灰色
粗砂 黄褐色・褐色細砂・遺物含む・
なごりしている

(S F 2 土壘跡)
I 10Y R 5%にぶい黄褐色

粗砂 硬い、炭化物・シルトブロック
を含む

2 7.5 Y 5%明褐色
粗砂 小礫混じり堅くし硬くしまる

3 7.5 Y 5%オリーブ褐色
粗砂 炭化物を少々含む

4 2.5 Y 5%オリーブ褐色
粗砂 大粒の炭化物が多く、北側では
小豆大的礫が多い

5 2.5 Y 5%オリーブ褐色
粗砂 小礫・炭化物を含む

6 10Y R 7%明黄褐色
粗砂 硬いブロック状、ほぼ均質であ
る

7 5 Y R 5%暗赤褐色
粗砂 粉の細かい礫が硬くつまって
いる酸化している

8 7.5 Y 5%炭オリーブ色
粗砂 均質で硬い

9 10Y R 5%にぶい黄褐色
粗砂 小礫混じり2枚の炭化土層には
さまれている

10 5.5 C 5%灰青色
粗砂 均質で差し気がない

11 10Y R 5%明黄褐色
粗砂 小礫混じり

12 2.5 Y 5%暗灰褐色
粗砂 小礫が混じっている

13 5 Y 5%オリーブ黒色
粗砂 深い灰の層が重複になってい
る

14 7.5 Y 5%灰白色
粗砂

15 5 Y 5%炭灰オリーブ色
粗砂

16 5 B G 5%暗青灰色
シルト 米粒大の炭化粒とブロック状の
白色シルトが混じる

17 2.5 Y 5%オリーブ褐色
粗砂

18 5 Y 5%炭オリーブ色
シルト

19 2.5 Y 5%明褐色
シルト

20 5 G 5%暗緑灰色
粗砂

21 10Y R 5%にぶい黄褐色
粗砂

22 10Y R 5%褐色
粗砂

23 2.5 Y 5%黒色
シルト

24 5 G 5%黒色
シルト

25 1.5 G Y 5%暗緑灰色
粗砂

26 2.5 Y 5%オリーブ褐色
シルト

27 2.5 Y 5%明赤褐色
粗砂

28 2.5 Y 5%明黄褐色
粗砂

29 10Y R 5%黄褐色
粗砂

30 10Y R 5%灰黄色
粗砂

31 2.5 Y R 5%暗赤褐色
粗砂

(遺構) ① 2.5 Y 5%暗灰褐色
粗砂

(遺構 b) ① 2.5 G Y 5%オリーブ灰色
シルト

② 7.5 Y 5%炭褐色
シルト

③ 2.5 G Y 5%炭オリーブ灰色
粗砂

④ 5 Y 5%灰色
粗砂

⑤ 5 Y 5%灰褐色
シルト

(遺構 d) ② 2.5 G Y 5%オリーブ灰色
粗砂



S D 1 堀跡土層断面(北西から)



S F 2 土壘跡土層断面(北西から)

第4図 S D 1 堀跡(青)・S F 2 土壘跡(赤) 土層断面(S = 1 : 40)

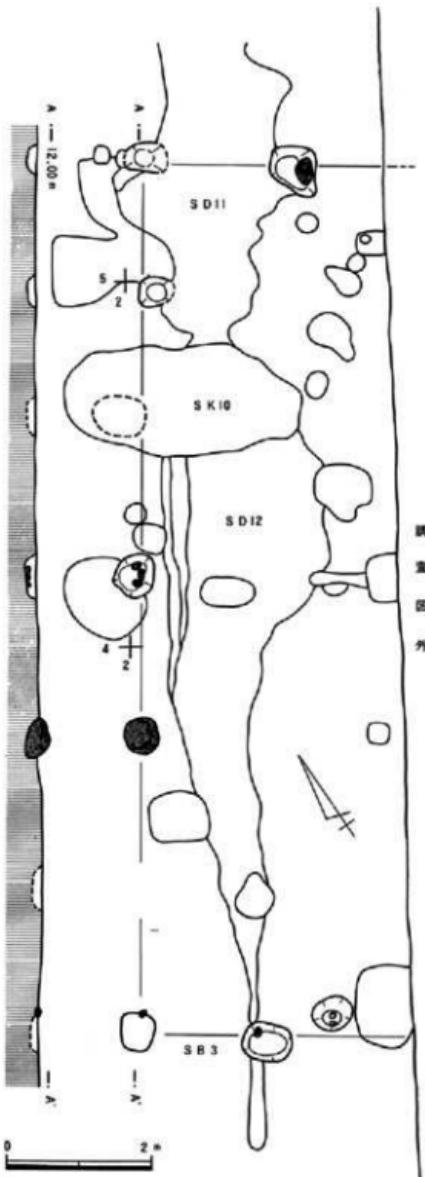
東西2間(7m)、南北6間(12m)まで確認されたSB3建物跡(第5図)は、遺存する礎石は2箇所にとどまるが、根固め石が残る礎石抜き取り穴が見られることから礎石建物跡と考えられる。柱間の距離は、東西で2~2.4m、南北で3.9~2.2mを測る。方向は、現存する土壙と平行関係にある。

SK10土壙(第6図)は調査区北側に位置する。長径3.3m、短径1.5mの長楕円形を呈する。深さは57cmを測る。西壁のみ緩やかな傾斜で掘り込まれるが、他は急傾斜である。底は平である。土壙西寄りにSB3建物跡の礎石抜き取り穴が見られる。中央部はSD11溝跡によって切られる。出土遺物は珠洲系陶器・瀬戸系陶器・染付をはじめ7点である。

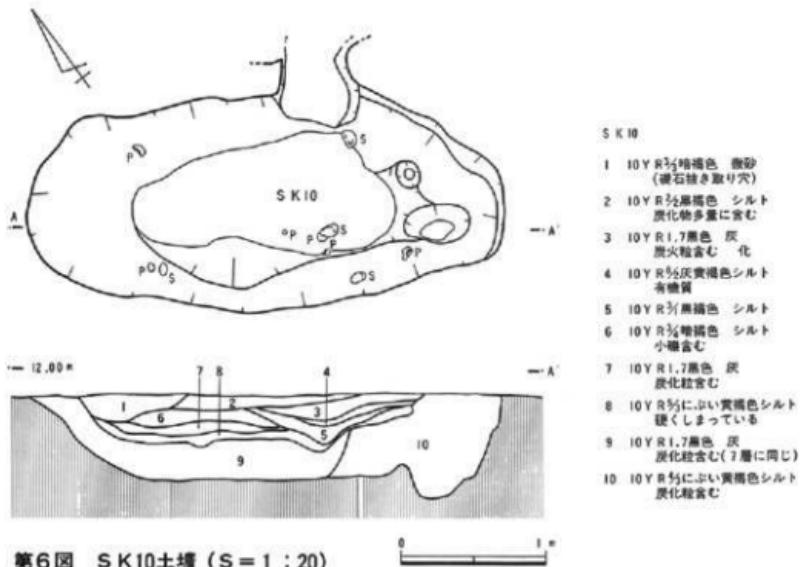
SD11溝跡は、長さ5mまで検出し、調査区外北側へ延びる、幅1~1.5mの溝跡である。深さは14cm前後と浅めであるが、部分的に40cm程の小土壙状の穴が見られる。出土遺物は、珠洲系陶器・越前系陶器・青磁・染付等26点である。

第2面の遺構は、径20cm程の円形ピットが多く、他は溝跡である。上層遺構の掘り込みによる擾乱が大きく、遺構としてのまとめりは確認できなかった。

以上が今回の調査で検出された主な遺構である。これらの遺構の在り方から、調査区は藤島城跡の本丸南端の一部であり、本丸内には比較的大きな建物が存在したと考えられる。



第5図 SB3建物跡(S=1:40)





S B 3 建物跡(北西から)

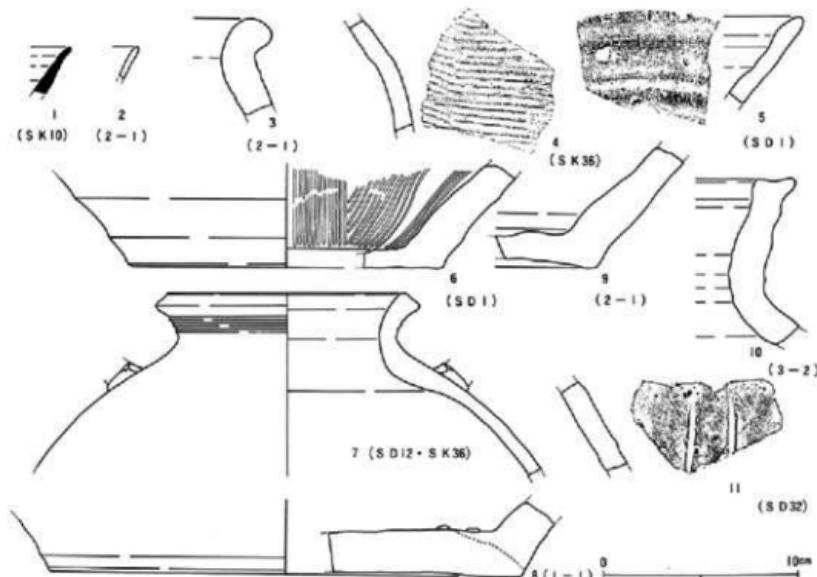


S D 12溝跡(北から)

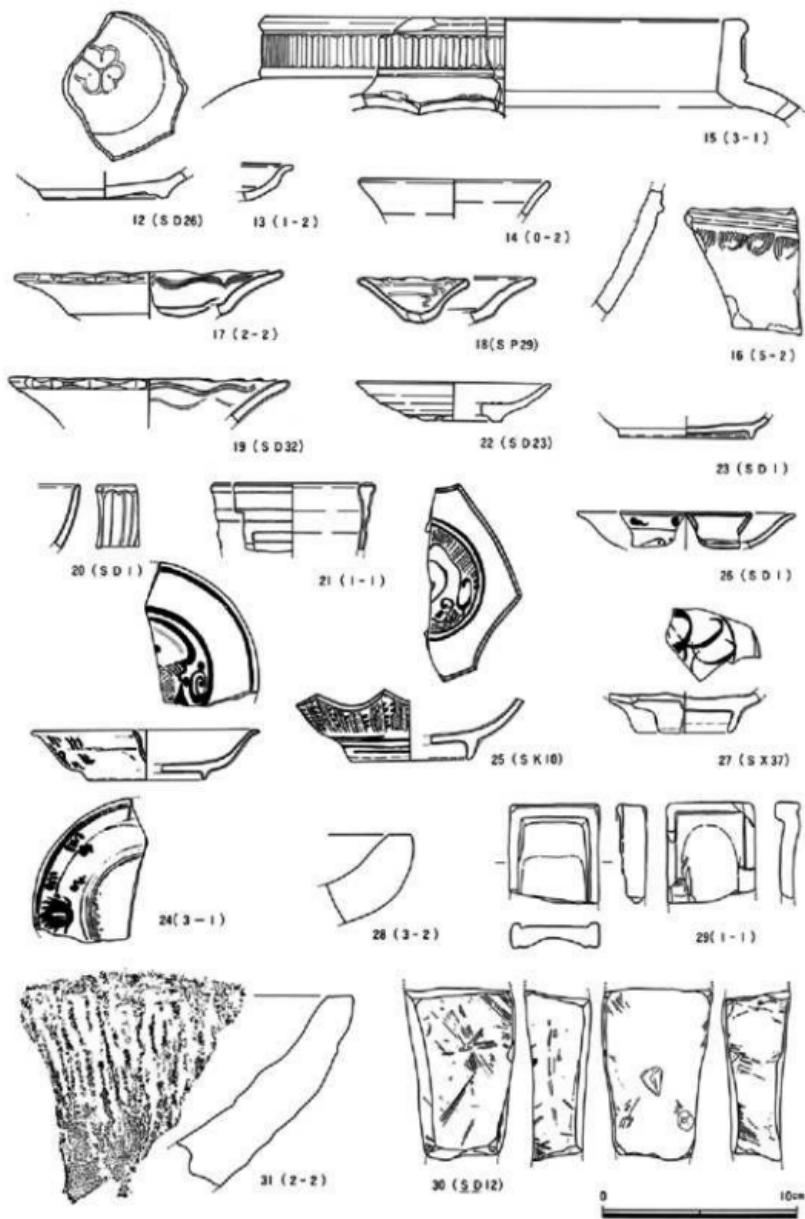
2 遺物

今回の調査で出土した遺物の総数は、277点である。その中で陶磁器類が194点を占める。最も出土量が多かったのは、珠洲系陶器の51点(26%)である。次いで越前系陶器の39点(20%)青磁33点(17%)・染付21点(11%)・瀬戸系陶器16点(8%)・瓦器12点・白磁7点・須恵器5点・かわらけ4点・唐津焼1点が数えられる。陶磁器類以外では、鉄滓を含む金属品が51点・塊になったものを含む錢貨が16点・石製品16点である。

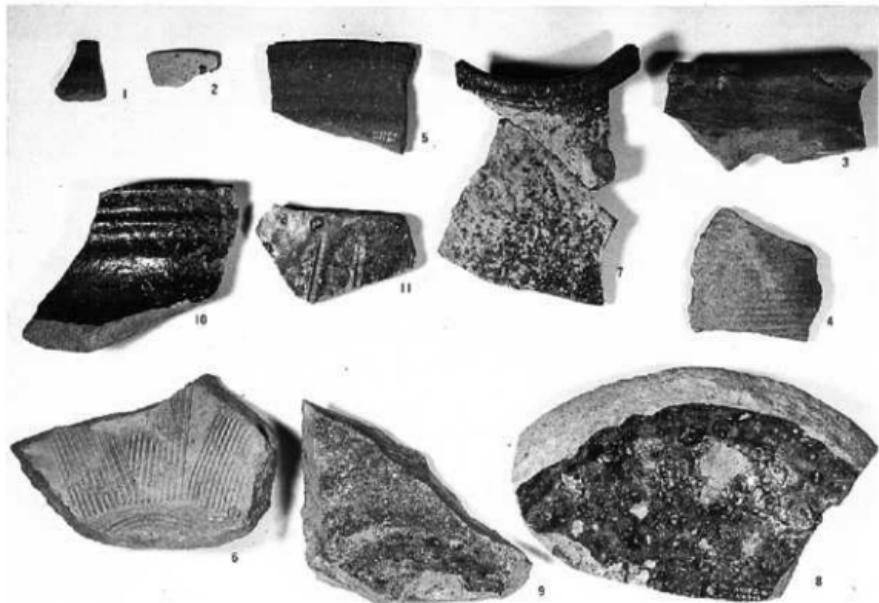
1は須恵器の坏、2はかわらけである。3～7は珠洲系陶器である。3・4は甕、5・6は擂鉢、7は耳を張り付けた所が1箇所のみ認められるものであるが、四耳壺であると考えられる。8～11は越前系陶器である。体部外面と底部内面には緑色の自然釉が掛かる。11は壺の体部に刻印が施されたものである。12・13は瀬戸系陶器の灰釉皿、14は唐津焼の皿、15は瓦器の風炉、16は同じく瓦器の深鉢形火鉢である。17～19は口縁部を輪花とし、内面に劃花文を施す青磁皿、20は外面に退化した蓮弁文を施す青磁碗、21は同じく青磁で、竹の節香炉の一種と考えられる。22は高台に抉りをいたるもの、23は輪高台の白磁皿、24・26は明代嘉靖期のものと考えられる染付皿、25・27は染付碗である。28～31は石製品である。28は茶臼、29は両面に使用痕が残る硯、30は砥石、31は外面に粗いノミ痕、内面に細いノミ痕が明瞭に見られる鉢である。以上が図化した主な遺物の概略である。



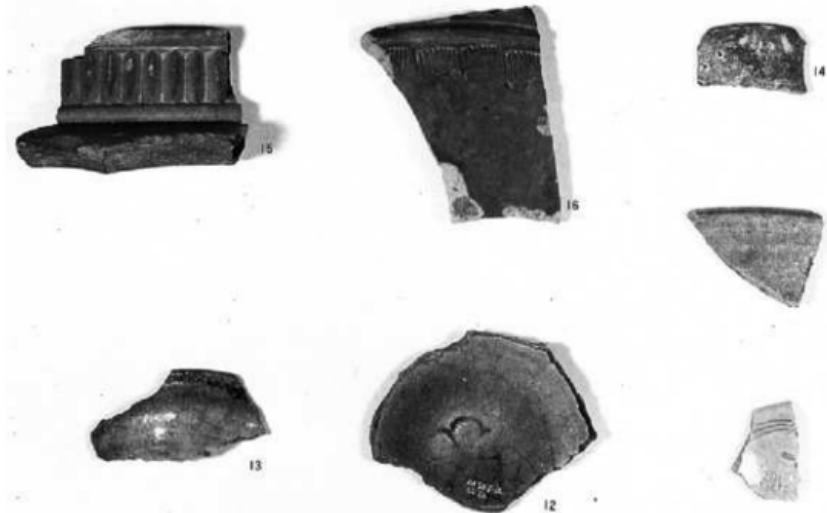
第7図 遺物実測図(1) (S=1:3)



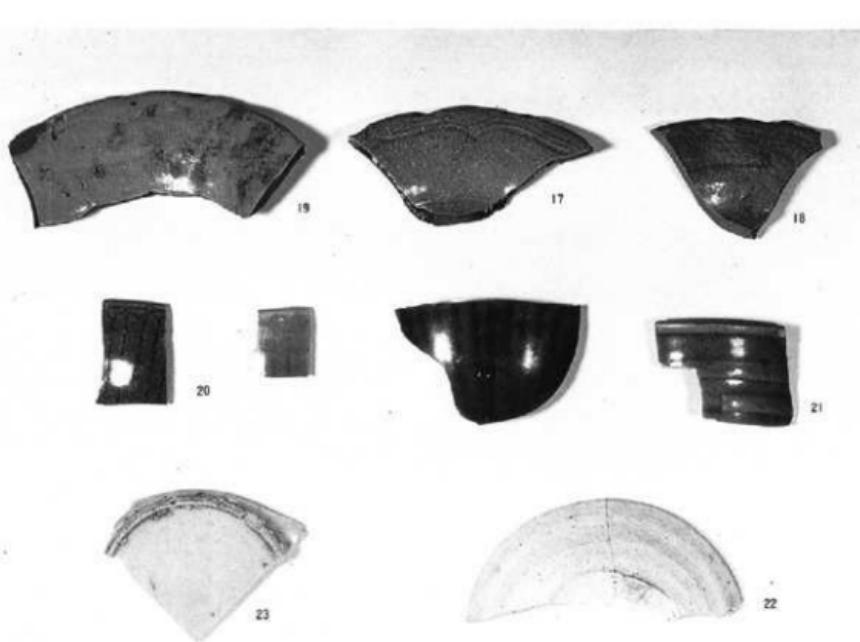
第8図 遺物実測図(2) (S = 1 : 3)



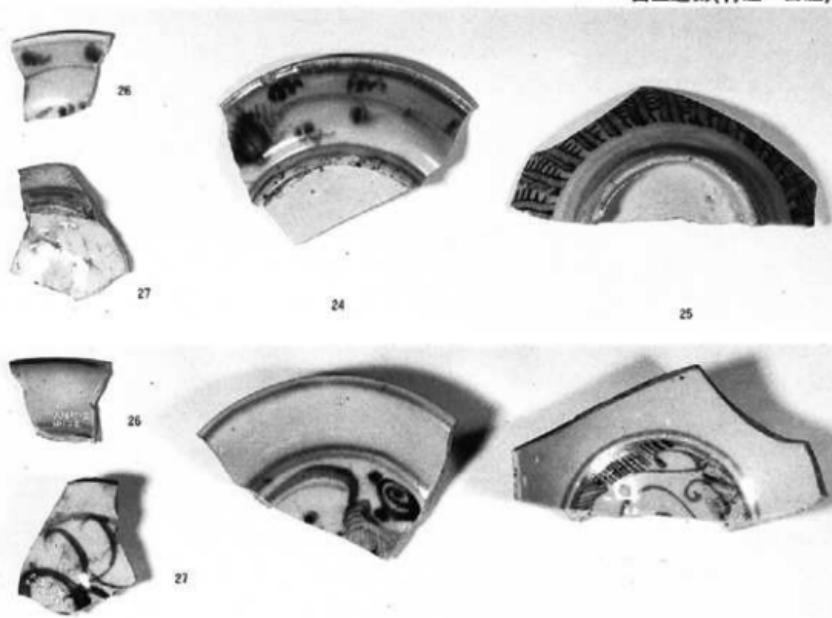
出土遺物(陶器)



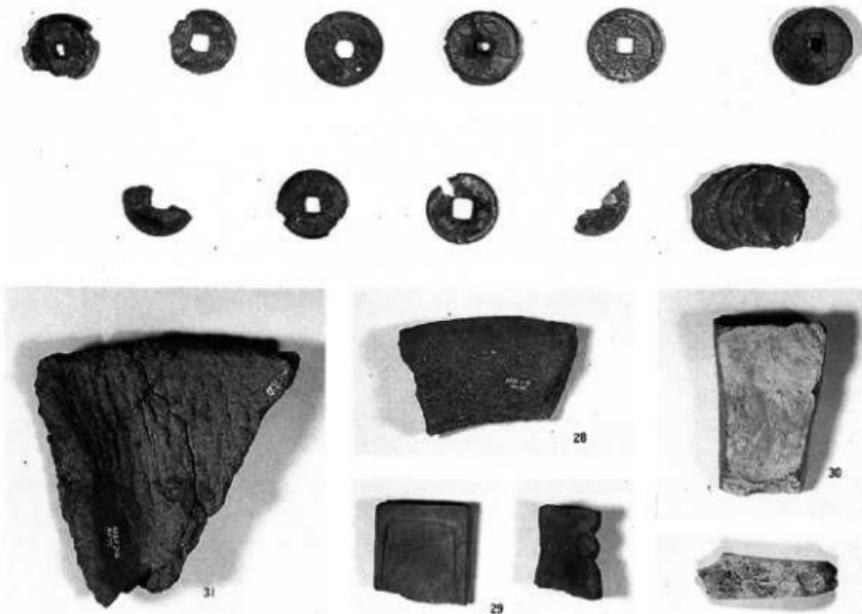
出土遺物(瓦器・陶器)



出土遺物(青磁・白磁)



出土遺物(染付)



出土遺物(錢貨・石製品)

V 調査のまとめ

今回の調査は、県立庄内農業高等学校ガラス温室新築工事に係る緊急発掘調査である。調査期間は平成元年6月13日～7月7日までの延べ19日間である。調査対象面積は240m²である。本調査は、藤島城跡の第3次調査にあたる。

遺構については小規模な調査ながら、土塁跡・堀跡・礎石建物跡が検出され、藤島城跡の形態を知るうえでの足掛かりが得られたと考えられる。土塁跡・堀跡に関しては、現存するものとの関連が課題と言えよう。また第1面の遺構に関しては、遺構間の切り合いからSD12→SK10・SD11→SB3の新旧関係が認められる。SK10とSD11は同時存在も考えられるので、第1面で最低3期、さらに第2面を含め最低4期の変遷が考えられる。

遺物については、出土量は少ないものの、豊富な種類が見られる。数値的には、かわらけが際立つて少ないので特徴と言える。それ以外は珠洲系陶器の甕が若干多い他、大きなばらつきは認められない。また瀬戸系陶器・青磁・白磁・染付等の小物の器種別個体数を見ても、碗と皿の数に極端な差は感じられない。これらの遺物は、第1面、第2面とも年代幅は感じられず、概ね15世紀中葉から16世紀中葉にかけて生産されたものが主流を占めると考えられる。今回の調査では14世紀代までさかのほる良好な資料は得られなかった。

山形県埋蔵文化財調査報告書第160集

ふじしまじょう
藤 島 城 跡

第3次発掘調査報告書

平成2年3月15日 印刷

平成2年3月20日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 株式会社田宮印刷所
